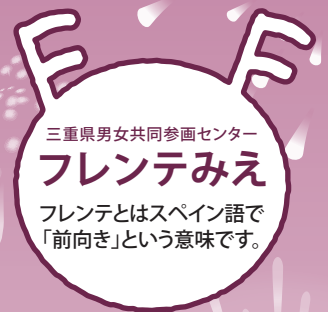


Frente



2024. 8
vol. 98

事業報告

- 誌上report
「私の苦しさ、全部母のせい?」
- フレンテフェスタ2024 ほか

事業ご案内

- 種まきプロジェクトⅢ “社会の課題”編
「政治に関心がない」「全然分からない」って
言っているままでいいの?
～女性限定:政治とワタシのかかわり方～
- 女性に対する暴力防止セミナー
「モラハラ夫と食洗機
～実例から得る“気づき”と“対策”～」
- 男性講座「おとうさんセミナー」 ほか

スタッフコラム

- “気づき”の綿帽子
～その2 朝ドラより～

だれかではなく『わたし』＝実現の人。



特集!

そうぶん30周年記念事業開幕直前企画
「ニキ・ド・サンファル展」
アナザーストーリー

「ニキ・ド・サンファル展」アナザーストーリー

ニキ・ド・サンファルに魅せられた女性Yoko… 増田静江さんの人生



撮影：黒岩雅志

8月31日(土)にいよいよ開幕する「ニキ・ド・サンファル展」の展示作品数は、約130点。

実は今回の展覧会で展示する作品は全て、日本人女性コレクターのYoko(ヨーコ)こと増田静江さんが集めたコレクションです。

東京下町にある日本料理店の女将だったヨーコは、50歳の時、ニキが創作した1枚の版画作品と出会い、瞬く間に魅了されコレクションをはじめます。その後ニキ本人とも交流を深め、ついには日本に「ニキ美術館」を創設するまでとなりました。波乱と情熱に富むヨーコの人生に迫ります。

ヨーコは、1931年、東京上野の宮内庁御用達の日本料理屋「花家」の3姉妹の長女として生まれます。家父長制が当たり前の時代でしたが、料理人で職人気質の父親は自身が無学で苦労をしたこともあり、娘たちに学ぶ機会を与えます。一方で、躰が厳しい母親からは愛情を感じる事ができないまま、ヨーコが9歳の時に死別。母の死、戦争、疎開、東京大空襲を経験した子ども時代、終戦をむかえ高揚感と好奇心にあふれた学生時代を経て、後に「パルコ」会長となる増田通二と出会い恋に落ちます。二人は父親の猛反対のなか駆け落ちし、結婚します。

ワンオペ育児、苦悩の日々



子どもたちと桃狩り。
ワンオペの中、子どもたちと過ごす時間もつくれた。

「料理、洗濯、掃除は全部ぼくがやってあげる」と言っていた通二でしたが、フタを開ければヨーコが全てやることに。頼れる人もおらず、慣れない家事を続ける毎日。子どもを二人出産しますが、母親を早くに亡くしていることもあり子育てもたった一人で手探り状態。母親に愛されなかった思いも蘇り、自分を肯定できないままでした。通二とは離婚も考えるほどになっていきます。

仕事を変えたばかりの通二は、余裕もなく家にお金も入れてくれません。ヨーコは経済的自立の必要性を感じ、また病気がちだった父親の店の再建を手伝うため、家業を継ぐことを決めます。仕事が忙しくなる一方で、子どもに関わる時間を作ることができず、「仕事」と「家庭」との板挟みに苦しみ、次男を遠方の知人に預けるという苦渋の選択をします。仕事に励んでも、周囲からは「女のくせに」「女に何ができる」と言われ続ける日々。孤独に社会と戦ってきました。家庭でも社会でも「女性」であるがゆえの苦悩が付きまとうヨーコ。一見、スーパーウーマンのような強さを感じるヨーコですが、多くの女性と同じように悩んだり、苦しんだりしていたのです。

突然の“出会い”

1980年、喫茶店を経営していたヨーコは、ふらりと立ち寄ったギャラリーで一枚の版画作品に出会います。それがニキ・ド・サンファルの『恋人へのラブレター』。この版画を一目見た時、“UFOから白い光線が降り注いで辺りの気配が遠ざかり、体が硬直し呆然と立ち尽くしたような感覚”に襲われたそうです。その後もニキの作品のことが頭から離れなくなり、その思いを確かめるためにギャラリーにあった作品をすべて購入。更にそのわずか4か月後には、それらの作品を眺めるためにギャラリー「スペースニキ」を創設します。

なぜそこまでニキに惹かれるのか。ニキのことを探求していくうちに、ヨーコはニキと自分の共通点に気づきます。生まれた場所は違っても、同じ時代に生まれたニキの、作品の中に込められた戦争や社会に対する怒り、ジェンダー規範を押し付けられる苦しみ。そして、自分はどうか生きていくべきか。それらはヨーコ自身を投影しているかのように感じられ、そしてついには「ニキは私だ」と思うようになります。

1980年代の日本は、男女雇用機会均等法が成立しフェミニズムを語り始める女性たちが活動を始めた時代でもあります。「スペースニキ」では、ニキの作品を通じて女性同士がフェミニズムを語る空間となっていました。

ニキとの“出会い”

ニキ作品を愛し「スペースニキ」というギャラリーまで作ったものの、ニキ本人とは会ったことがなかったヨーコは、ニキに会いたいとパリの美術館関係者に手紙を書きます。そしてその行動力が実を結び、ついにニキと会う機会を得ます。しかし、ニキは世界的に有名でかつセンシティブな芸術家。ヨーコは日本の一ファンにすぎません。当初、ヨーコの熱狂ぶりにニキは戸惑いを感じ、時にヨーコの行動がニキの逆鱗にふれることもありました。しかし、交流を重ねることによりヨーコのニキに対する思いや作品への理解が伝わり、友情が育まれます。そして最後にはお互いが「前世でつながっていた!」と感じるほどの強い結びつきへと変容していきます。

1994年10月、ヨーコは数えきれないほどの困難を乗り越えて、ニキの作品だけを集めた「ニキ美術館」を栃木県那須町に開館させます。そして1998年、ようやくニキは家族とともに初来日し、「ニキ美術館」を訪れ、美術館を建てたヨーコに大いなる感謝を伝えました。

ニキに出会うまで美術に関してまったくの素人だった女性が、強い愛と情熱でニキとも絆を結び、類まれなるバイタリティでその絆の結晶ともいえる美術館を設立。ニキとヨーコ、二人は運命の相手だったのかもしれませんが。

その後、病気を抱えていたニキはその4年後の2002年に、ヨーコは2009年にこの世を去りました。



在りし日のニキ美術館

撮影：黒岩雅志



1993年頃。
美術館建設着工すると、那須と東京の2拠点生活がはじまった。

撮影：黒岩有希

「ニキ美術館」は2011年に惜しまれながら閉館することとなりましたが、ヨーコが集めたニキの作品たちは、ヨーコの家族の手によって大切に保管されており、今回ご縁が繋がって三重にやってくることとなりました。ニキの作品はどれもパワーが漲っています。その作品をじっくり見つめると、作品の奥にある喜びや生命、苦悩や葛藤などニキの物語が見えてくるでしょう。きっとそれはヨーコの物語でもあり、あの時代を生きた女性たちの物語。そして、混沌とした現代を生きる私たちの物語でもあるのかもしれません。

参考:黒岩有希著「ニキとヨーコ」(NHK出版)

「ニキ・ド・サンファル展」では、ヨーコが初めて出合い衝撃を受けた版画作品『恋人からのラブレター』やニキとヨーコが交わした絵手紙たちのほか、ヨーコが紡いでくれたニキからの贈り物のような素晴らしい作品たちが、みなさんをお待ちしています。「スペースニキ」で語らいが生まれたように、この「ニキ・ド・サンファル展」からも多くの語らいが生まれることを願って…。



8/31 ▶ 9/23 ニキ・ド・サンファル展

日時 8月31日(土)～9月23日(月・祝)
※休館日を除く 10:00～17:00
9/14、9/21は19:00まで

会場 三重県総合文化センター内 三重県文化会館 第1ギャラリー
観覧料 800円(高校生以下無料)

助成：公益財団法人 岡田文化財団
後援：独立行政法人 国立女性教育会館
協力：(株)スペースニキ、三重県立美術館、三重県総合博物館(MieMu)

事業予告

11/3・12/7 種まきプロジェクトⅢ “社会の課題” 編

「政治に関心がない」「全然分からない」って 言っているままでいいの? ～女性限定:政治とワタシのかかわり方～

「今まで政治のことなんて全然考えてこなかった」、「選挙で誰を選んできいいか分かんないし」「投票へは行くけど、立候補は無理。それ以外にできることなんてあるの?」そういう皆さんのための講座です。この講座で分からないことだらけの政治について学んでみませんか? 候補者についての情報の調べ方から、選ぶ、選ばれる以外にもいろいろある政治とのかかわり方、立候補をすることや議員の仕事についてなど、政治について主体的にかかわるための多様な知識をラインナップ。政治は決して遠い世界のことじゃない。今までとは違う視点で社会が見えてくるかも!

講師には、情報番組にも出演中の能條桃子さん、女性議員や候補者の支援をされている濱田真里さん、三重県議会の女性議員をお招きします。講義のほかに、参加者同士の話し合いや議会見学などのフィールドワークも予定しています。肩の力を抜いて、楽しく、気軽に政治について考えるこの講座にぜひ参加してください!



能條桃子さん



濱田真里さん

事業案内

日時 11月3日(日祝)・12月7日(土)
10:00～15:00
(別日でフィールドワークを予定)
会場 三重県総合文化センター内
三重県生涯学習センター4階
大研修室 ほか
対象 テーマに関心のある女性
参加費 無料
定員 30名
講師 能條 桃子さん(NO YOUTH NO
JAPAN代表 FIFTYS PROJECT
代表)
濱田 真里さん(Stand by Women
代表)
三重県議会女性議員
託児 あり 要事前申込 1歳6ヶ月～小
学3年生程度 子ども一人につき
500円 託児申込締切9/28

11/23 女性に対する暴力防止セミナー 「モラハラ夫と食洗機」 ～実例から得る“気づき”と“対策”～

自身の道徳感や倫理観で相手を支配しようとする「モラル・ハラスメント」は、人の尊厳を傷つける精神的暴力としても大きな社会問題となっており、早急な対応が必要です。家庭でも職場でも起こりうるモラハラの防止には、性別に関わらず、気づきを得るための知識と具体的な対処法を学ぶ必要があります。

令和6年度の「女性に対する暴力防止セミナー」では、2,000件を超える離婚・恋愛トラブルを扱うなかモラハラに関する著書も出版されている本テーマの第一人者、堀井亜生弁護士をお迎えし、家族のあり方が多様化する今、パートナーとの関係を見直し自分の力で生きるうえで必要な意識、知識と対策などについて、その豊富な実例を基にお話をうかがいます。(※講師はオンラインでの出演です)



事業案内

日時 11月23日(土・祝) 13:30～15:00
会場 三重県総合文化センター内 三重県
文化会館 1階 レセプションルーム
対象 テーマに関心のある方
参加費 無料
定員 40名(レセプションルーム)
※オンライン(Zoom ウェビナー)への直接参
加や県内サテライト会場も予定しています。詳
しくは事業チラシ、ホームページをご確認くだ
さい
講師 堀井 亜生さん(弁護士/堀井亜生法
律事務所代表) ※オンライン出演
託児 あり 要事前申込 1歳6ヶ月～小
学3年生程度 子ども一人につき
500円 託児申込締切11/16

11/9 ▶ 12/1

内閣府「女性に対する暴力をなくす運動」(パープルリボン運動) 総文パープル・ライトアップ2024

毎年11月12日～25日の2週間は、「女性に対する暴力をなくす運動」期間です。

女性に対する暴力根絶のシンボルであるパープルリボンにちなみ、紫色にライトアップする「パープルライトアップ」が各地で実施されています。フレンテも、竹あかり作家の川淵皓平さん率いるcanaarea(カナエリア)の演出で、「そうぶんの竹あかり」とコラボ開催します。暴力は性別を問わず、いかなる状況下であっても、身近な関係性であっても、決して許されるものではありません。家庭内の暴力からは、ひとりで抜け出すことは難しく、またDVが起きている家庭では、子どもに対する暴力が同時に行われている場合があります。もしも暴力を受け、悩みを抱えているときは、一人で悩まず相談してください。悩んでいる方を見かけたら、相談先を教えてあげてください。もし「児童虐待かも?」と思ったら、速やかに関係機関に連絡を。周囲の人たちが虐待にいち早く気づき、行動することが、子どもを守り、虐待をする保護者も救うことになります。



事業案内

日時 11/9(土)～12/1(日) 17:00～21:00 ※休館日を除く
会場 三重県総合文化センター 知識の広場ほか

12/14 男性講座 おとうさんセミナー ～安心できる家族を作るおとうさんになるために～

家族にとって「安心できる父親」ってどんな姿?

自分では家族を大切にしているつもりだし、愛しているつもり。でもなんだかうまくいっていない気がしてもややや…。これから父親になるけど、どうやって家族を作っていくのか分からない…。そんなことを感じている方はいませんか?

この講座では「家族が安心できる父親」になるためにはどうすればよいのか、家族と父親との関わり方について皆さんと一緒に考えます。

男性だけでなくすべての方にご参加いただけます。ご夫婦やカップル等での参加も大歓迎!



事業案内

日時 12月14日(土) 13:30～15:00
会場 三重県総合文化センター内 三重県男女
共同参画センター「フレンテみえ」2階 セ
ミナー室A
対象 テーマに関心のある方
参加費 無料
定員 30名程度
講師 高橋 郁絵さん(原宿カウンセリングセンター)
託児 あり 要事前申込 1歳6ヶ月～小学3年
生程度 子ども一人につき500円 託児
申込締切11/30

事業報告

Event Report

フレンテフェスタ2024

はっけん! かがくのみりよく みんなのみりよく

開催日 6月2日(日)

様々なブースが一堂に会するフレンテみえのおまつりイベント。

今年のテーマは「はっけん!かがくのみりよく みんなのみりよく」。科学やものづくりなど「男の子のほうに得意」と思われがちな分野を、性別に関係なく多くの子どもたちに楽しんでいただきました。

いくつかピックアップしてご紹介します!

お天気魔法教室

気象予報士で静岡朝日テレビ気象情報担当の渡部圭吾さんと、同じく気象予報士でNHK津放送局気象情報担当の親見麗菜さんにお越しいただきました。大きな地球儀型のスクリーンで気象のお勉強をしたり、お天気パングと一緒に気象災害から身を守る方法をクイズ形式で学んだり、生活と密着したお天気のお勉強をすることができました。



ものづくりワークショップ

ものづくりを体験できるワークショップを多数用意しました。

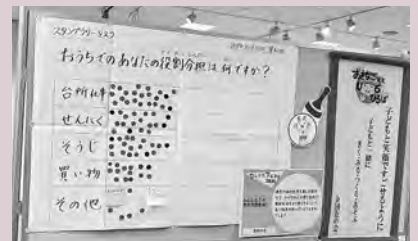
昨年も大人気だった県内の学校さんにお越しいただくワークショップ。輪ゴム銃作りの松阪工業高校、不思議な虹色コマが作れる三重大学教育学部理科教育コースに加え、今回は3Dホログラム体験の伊勢工業高校さんにもお越しいただきました。

ほかにも、モザイクタイルを使ったタイルアートや紫外線で色が変わるビーズ付きの貝殻ストラップ作り、バック等の廃材でのおもちゃ作りなど、楽しくものづくりに挑戦していただくことができました。



スタンプラリー

ジェンダークエストと題したスタンプラリーを行いました。各出展ブースに行きスタンプをもらうだけでなく、男女共同参画に関するミッションに挑戦してもらうという形式で、参加者のみなさんにジェンダーについてじっくりと考えていただく機会となりました。



三重県総合文化センター開館30周年記念 フレンテみえファンファーレ事業

緒方恵美 講演会

「声優-オンナとかオトコと違って、境界線に立って考えてみた」

開催日 5月11日(土)



三重県総合文化センター30周年の節目を記念して、30年以上「声優」として第一線を走り続ける緒方恵美さんに、講演いただきました。

声優として生きてきた中で7~8割は少年役か青年役で、女性の役をやることはあっても『「女優」という感覚を持ったことはない』という緒方さんが、声優のアワードで「主演女優賞」を受賞されたときのエピソードを紹介いただき、『本人の性自認も分からないのに性別を冠するのはどうだろう? 世界を見渡せば、もはや男優/女優という言葉を取っ払った賞がたくさんある』とお話いただきました。

また、『絶対に男性的/女性的な人というのは、いなくないですか?』と問いつつ、『男性だって泣きたい時はあり、男らしさを押し付けられて窮屈だと思う方もたくさんいらっしゃる。その逆もそうで、すべての人が男と女の部分を配分的に持っている』と、ご自身の経験や考え、生物学的な見地からもお話しいただき、『全ての人は男と女の狭間にいる』と語っていただきました。

中ホールは満席。来場いただいた皆さまからの質問にも応えていただき、濃厚な講演会となりました。

「私の苦しさ、全部母のせい？」

娘として、母親との関係にもやもやする、なぜか苦しい…。そんな「母・娘のあり方」に悩む女性はたくさんいます。そんな皆さんに、母親からの影響と自分の生きづらさの関係を解き明かし、自分の人生を取り戻すための方法について考える講座を開催しました。

講師は、フェミニストカウンセリング堺・フェミニストカウンセラーの加藤伊都子さん。そのお話の一部をご紹介します。



「あんなお母さんじゃなかったらよかったのに…」という問いを持つ人はすごく多いですね。では、「あんなお母さん」って、どんなお母さんでしょう。

「べったり母」「娘に甘える母」「過干渉母」「かわいそうな母」「自分の人生を生きられなかった母」「無関心母」「母親らしい情緒を感じられない母」「残酷な母」「娘を傷つける母」…。これらは私の著書「私は私、母は母」の中でこういうお母さんがいますよとして出した例です。最近登場してきているのは、「汚部屋の母」。

では、「あんなお母さんじゃなかったら私の人生はもっとうまくいったのに」と思う人はどうすればよいのでしょうか。

そこで考えてもらいたいのは、お母さんが“くれなかったもの”は何なのか、ということ。

それは、自分が存在してもいいんだ、自分はこの世にいていい大事な存在、特別な人間なんだという想いです。自分は大事な人間だと自分で思えること、そう感じられる経験を母親からもらえなかった。そして、対人関係の知識や訓練もです。お母さんと娘がベターと一緒にいたら多様な人間関係はできません。世の中の人はみんなお母さんみたいな人だと思っちゃう。でもそう

じゃないですね。また、小さい子はいろんな人間関係を知っていくことによって「自分が中心じゃないんだな」とわかっていきますが、それでもなお、私のことは私が決めていい、私がいいと思うものが私にとってはいい、自分は自分であっていいという感覚。これも多分もらえていない。これは、否定されると身につかないものです。自信とか自尊心、ここにいてもだれも私を攻撃しない、否定しないという安心や安全の感覚。これが持てていない。ということは、生きづらさに対してはこれらを手に入れればいいということです。自分が大切な存在だと思えて、いろんな人と付き合いができて、かつ自分のことは自分で決めていいと心から思えて、自信と自尊心があれば、生きていきやすくなります。

母親からもらってしまったもの、くれたものが何か。これを考えていくことに意味がある。くれたものの中にいらないものがあるんです。それを捨てましょう、ということですね。

母親から流れる“毒”

「毒親」とは、具体的には「子どもを管理・支配する人」です。では、その「毒親」から身を守るために、子どもはどうすればいいでしょう。

「毒親育ち」の特徴は、まず自分を大切にできない、人や行為や物に依存しやすい、つい人の顔色を窺ってしまうということ。毒親からの命令や指令で動いているわけですから、楽しんでいる自分に罪悪感を覚え、受動的で自発的に行動できない、周囲の期待に応えようと無理をしがちで言いたいこと・やりたいことがあっても我慢してしまう。こういう特徴は男でも女でも同じですが、男の子と女の子で向けられるものが少し違います。

まず、お母さんたちは自分の娘に対する理想が高い、というか厳しい。娘に対する要求の高さを言葉にしますので、結局「あなたは駄目だ」というメッセージばかりになります。非難と侮辱、たれ流される文句と苦情、繰り返される説教。役に立たない通俗や道徳を教えられ、厳しすぎる評価とルール。合格点は決して出ません。

ほかにもよくあるのは、お母さんが自分の人生を呪うこと。あんなお父さんと結婚したばっかりに…というやつです。これが、簡単に人を信じちゃいけないとか、世の中ってろくなことないんだという教育になる訳です。お母さんもしんどい思いをして、幸せになると思って結婚したら嘘ばかりで、「私はこんなに辛いのに、こんなに頑張っているのに…」と言いたいし、大変だったねと言ってもらいたい。でも世の中の人はそんなこと言いません。それで、娘に求めます。ひそかな自慢と同調の強制です。



母娘関係に潜むジェンダー教育

女の人って、「どうだ私は偉いだろ」という自慢はあまりしません。「私ってこんなに大変でしょ」という自慢はする。そのうえで娘には「人が苦勞していたら優しくしなきゃだめよ」ということを言い続けます。娘にとっては二重三重に矛盾する命令です。娘へのジェンダー教育がここに潜んでいる訳です。

この社会は「ジェンダー格差社会」と言われています。「男ジェンダー」と「女ジェンダー」では差があるんです。用意されている席も違う。女ジェンダーである娘に用意されている席を娘が蹴飛ばして男ジェンダーの席に座ろうとしたら、娘はすごいバッシングに遭う。それも辛いし、こんな風に娘を育てた、といって母親自身も責められます。ですから、娘をジェンダー社会に適応できる女性に育てなければならない。その責任は母親に負わされています。それが母親のジェンダー教育なので、娘からしたら「母親はわかってくれない」となってしまうんです。

この社会が娘に期待する役割は「家の中の女手」の一人として母親を助け、支えること。また、家の中の情緒を明るく安定したものにする「若い女」役割。家庭内の空気を整えるキーパーソンとして、家庭内の女性に期待されている道徳・品行方正・家庭秩序の守り手として、いつの間にか訓練されるんですね。家父長秩序の最下層としての他者優先の役割が、家庭内だけでなく職場などでも女性に割り当てられています。「無償のケア役割」です。子を産み、育て、家庭内の仕事…介護や看護、そういうものを担う。これを果たすために必要な資質は、「他者のニーズ、機嫌を察知する能力」です。こういう行動様式を、女の人にはトレーニングされている訳です。そして、これに適応してきた人が「お母さん」なんです。

女性役割に適応してきた人。そういう人は、自分自身がどう自分を評価し、その自尊心はどういう状態になっているのでしょうか。自分が人生の主人公ではない生き方をしなくてははいけない、「誰かを支える者、誰かに従属する者」として自分自身を位置づけ、そこに適応していく。そうすると自信と能力が失われていきますし、不幸や恨みが残ります。その恨みや不幸を娘にぶつけるわけです。母と娘ってやはり距離が近いんですよ。この不幸をぶつけていることとジェンダー教育とが相まって、女の方は母親との関係がすごくしんどくなるわけです。



「母」の跡をたどらない「私」に

では、新しい自分になるためにはどうすればいいのか。

まずは、「母という女性の限界は自分の限界ではない」ということ。そして、必要なのは「考えること」「感じること」「他者に自分を開くこと」です。「毒親育ち」は人に傷つけられるのが怖いから、他者に自分を開くのがすごく怖い。でも自分一人で「私ってどうなんだろう」って考えていても視野も広がりませんし、真実にも到達できないので、他者に自分を開いてフィードバックをもらうことが大事です。

何かを手に入れるためには何かを捨てることも必要です。今まで通りの関係はもう変えていかなきゃいけない。母への怒りが収まらない人は、たぶん母を許していないんじゃないかと、自分を許していないんです。まず自分を許しましょう。「あの母に育てられたんだからしゃーない」と。少なくとも母を変えることはできません。だから、お母さんに分かってもらいたいという思いはすごくよくわかりますが、そこは諦めましょう。

次に、母への怒りを手放すために、母という人の限界を知ること。この母がどんな環境で育ち、どういう思いをしながら生きてきた人かというのを知ることには意味があります。母が持つ偏りの原因や不幸のものは、母の育ちの中に理由があるからであって、娘には責任がありません。

大切なのは、他者からの肯定的なメッセージです。その肯定的なメッセージを、自分自身、友人、知り合い等々から浴びるほど受け取ることがすごく大事です。厳しいことを言ってくれる人が本物だと思うことはありませんからね。皆さんのことを好きでいてくれて、「素敵だねー」って言ってくれる人と付き合しましょう。そして、ちっちゃな嬉しさや楽しさ、よかったこととか肯定的なことを記憶の中に留めておけるような「心の中の器」を持ちましょう。淋しさや虚しさはあって当然の感情として受け止めるけど、そのことを握りしめ続けられない。持ち続けられない。有意義さとか効率性、生産性とは無縁の、「そんなものはどうでもよい」という適度な距離の、居心地の良い人間関係こそが必要なんです。

フェミニズムが始まる前の女性たちは「今のままのあんたじゃだめだ」というメッセージを死ぬほど言われていました。フェミニズム以降「今のあなたのままでいい」となっても、日常生活はまだそうなっていないんです。

だから、自分で自分に「OK」を。

不要なお母さんの教えなんかは捨ててしまっ、自分が楽なように生きていってください。

私たちが抱えている様々なざわつきを分かりやすい言葉にして落とし込んでいく加藤さん。聴いているうちどんどん心に光が差してくるような感覚になるお話でした。講演の後は参加者による語り合いも行われ、それぞれさらに気づきを深めていただきました。

“気づき”の綿帽子 ～その2 朝ドラより～

三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」所長 石井 由美

大きくなったら何になりたい？

日本初の女性弁護士であり、女性裁判所長を務めた三淵嘉子さんをモデルにしたドラマが話題になっています。楽しみにされている方もたくさんいることでしょう。

三淵さんは、1938年(昭和13年)に高等試験司法科に合格し、1940年(昭和15年)に弁護士となります。法律を扱う専門家である法曹には、裁判官・検察官・弁護士がありますが、当時、女性は裁判官・検察官には進めませんでした。三淵さんが、新たな道を切り拓くために相当な努力をし、困難を乗り越えてきたことは容易に想像ができます。現在、日本の法曹界における女性の割合は、弁護士約20%、司法官(裁判官・検察官)約22%(令和4年3月現在)、まだまだ男女格差はありますが、今後、女性の進出・活躍が期待されるところでもあります。

「男女共同参画社会基本法」が制定されて20年以上経過しましたが、男女の割合が偏った職業はたくさんあります。

例えば、男性が少ない職業としては、「歯科衛生士」「保育士」「栄養士」などがあります。一方、「航空機操縦士(パイロット)」「大工」「機械技術者」などは、女性が少ない職業です。

偏りの要因はいろいろあるでしょうが、私たちの無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)もその一つかもしれません。自分がめざす道に進むことができる社会、なりたい職業に就くことができる社会、男性だから、女性だからという理由であきらめなくてもよい社会であってほしいと思います。

※助産師国家試験は男性に受験資格がないため、男性の助産師は現在0(ゼロ)です。また、文化・芸術の世界では、男性だけ、女性だけという分野があります。

このコーナーでは、今年度新たに就任したフレンテみえの新所長が、新たな立場として感じたこと、気づいたことなどを、4回にわたってお話してまいります。どうかのんびりお付き合いください。

さて、今年4月に小学校1年生になった子どもたちを対象に「将来つきたい職業」を尋ねたアンケート結果が公表されていました。(クラレ調べ)

男の子 1位 スポーツ選手 2位 警察官
女の子 1位 ケーキ屋・パン屋 2位 芸能人・歌手・モデル

警察官、医師、ケーキ屋・パン屋の3つの職業は、男の子・女の子のどちらのランキングも10位内に入っていました。

子どもたちにとっても、自分の夢をあきらめることなく、自分のなりたい職業をめざしてがんばれる社会であってほしいと願います。

今年に入り、日本弁護士連合会の会長、検事総長をはじめ、企業等でも女性がトップに就任したというニュースをよく耳にします。女性がトップになった、ということがニュースになること自体、男女共同参画社会にはまだ遠いのかという思いもありますが、女性がトップになり、ロールモデルとして活躍してくれることで、男女共同参画社会の実現に弾みがついていくのではないかと期待します。

そして、今後のドラマの展開も大いに気になるところです。

～だれもがどれも選べる社会に～

令和6年度「男女共同参画週間(6/23～6/29)」
キャッチフレーズ

フレンテみえって、なに？

三重県の男女共同参画社会を推進する拠点施設として津市の三重県総合文化センター内に平成6年オープン。情報発信・研修学習・相談・調査研究・参画交流および人材育成の「6本の柱」で、様々な事業を展開しています。ぜひ皆さま、お気軽にお立ち寄りください！

～詳しい情報はホームページまで～

フレンテみえ 検索 🔍

生き方・家族・人間関係・離婚・職場 などなど…
男女がともに自分らしく生きるために、様々な悩みの相談をお受けします

☎ 女性のための電話相談 秘密厳守・相談無料

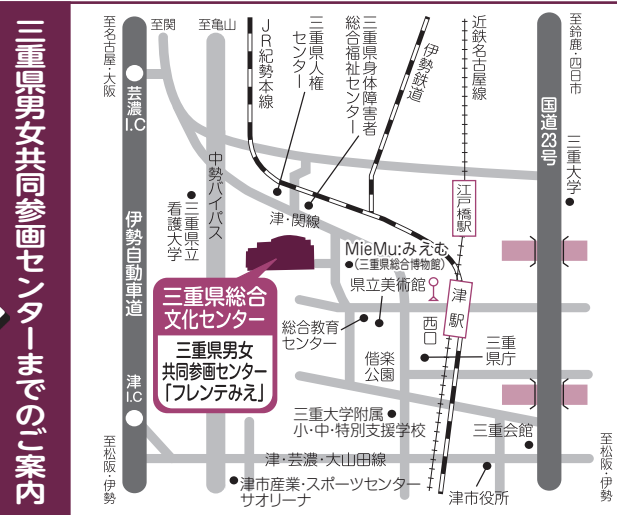
フレンテみえ相談室 専用ダイヤル 059-233-1133

相談時間	曜日	月	火	水	木	金	土	日
朝 9:00～12:00	休館日	●	●	●	●	●	●	●
昼 17:00～15:30	休館日	●	—	—	●	●	●	●
夜 17:00～19:00	※	—	—	●	—	—	—	—

※祝日の場合「朝・昼」相談あり(翌平日が休館日)

*このほか女性のための面接相談(法律相談・心理相談と、男性のための電話相談)も、にじいろ相談を実施中。詳しくはお問い合わせください。

フレンテみえ相談室のご案内
(切り取ってご利用ください)



休館日 毎週月曜日 年末年始 (12月29日から1月3日まで)
交通 ■バス/津駅西口1番のりばから約5分
■徒歩/津駅西口から約25分
■自転車/伊勢自動車道津雲井インターから約10分、津インターから約10分
※駐車場は、1,400台(無料)。できるだけ公共の交通機関をご利用ください。

発行 三重県総合文化センター
〒514-0061 三重県津市一身田上津部田1234番地
TEL:059-233-1130 FAX:059-233-1135
URL https://www.center-mie.or.jp/frente/
E-mail: frente@center-mie.or.jp

再生紙を使用しています。